

〔論 文〕

左右の観点からみた都市のあり方

鈴 木 武

〔 〕はじめに

日本における都市の中心市街地をみると、そこに住む人や街に親しんでいる人にとって「人の主たる流れ」があるケースが多い。多くの場合、街には鉄道駅があり、駅の表側が裏側よりも栄えている。駅を起点とし、表側にある繁華街を歩いていく。それが、その街における人の流れとして一番強い方向と信じられることが多い。もちろん、帰りはその方向が逆になる。それだからといって、主たる流れが帰り道の方向であると感じる人は少ない。

街によっては、駅を昔の街はずれに造っている。とくに城下町だった都市には、そのようなケースがみられる。その場合、昔の盛り場が現在もそのまま繁華街になっていて、そこを起点として城の方向にいくのが主たる流れと感じられることもある。あるいは、門前町のように、駅のあるなしに関わらず、寺に向かうのが主たる流れと感じられることもある。また、港町だったところは、港から陸地へ向かう道筋に歓楽街が残っているケースがある。

実際には、多くの人がある方向に歩いているわけではないが、街の人々が象徴としてその方向を主たる流れと感じている場合もある。この例は由緒ある城下町に多い。城の正門に向かっていく方向が、象徴としての主たる流れになっている。しかし、実際には、それとは直交する街路に沿って繁華街があるというような場合だ。いずれにせよ、街には「人の主たる流れ」があることが普通である。

店舗配置は、人の主たる流れの方向と密接に関連している。立派な建物やこぎれいな店舗は主たる流れに沿って配置されやすい。駅前には、デパートや銀行、あるいは立派なホテル、一流会社の

支店などが入った大きなビルが建っていることが普通である。その流れに沿って、ブティックやしゃれた店舗が並んでいる。あるいは、その流れの右側に、しばしば明るいアーケード街があり、一番の商店街をなしている。そこが中心的な買い物街で、その周りに若者が集まるファーストフードや娯楽施設がある。あるいは、普通の飲食店が並んでいて繁華街をなしている。

それに対して人の主たる流れの左方向の地域には、居酒屋、小料理屋、スナック等の歓楽街がある。少し大きな街になると、歓楽街は奥に行くほど、いかがわしいスナック、バー、クラブというものになり、ついにはソーブランドがあたりする。もっと大都会になると、ソーブランドの代わりにラブホテル街になることがある。そこが場末であり、その先は住宅街になっている。このようなケースがよくみられる。

街をひとつのキャンパスとみなそう。人の主たる流れの起点になる場所があり、流れに沿って、あるいはその右方向に、デパート、ホテル、銀行、オフィス街、買い物街などの正統的な機能が配置されやすい。それに対し、非正統的なやすらぎを求める歓楽街は、主たる流れの左方向に配置されることが多い。

このような現象は都市の機能配置についてだけみられる現象ではない。鈴木(1999)では、座席の位置、歩行の進路、肖像画やプロフィールの描き方、インタビューやカウンセリングにおいて座る位置、絵画における安定感や躍動感の描き方を例に挙げ、共通な現象がみられることを述べている。その要因として、左脳と右脳による情報処理の差に起因する左右の意味づけが多くの人に共通してあるのではないかと推測している。もちろん脳研究をしているわけではないので、状況証拠による単なる推測にしか過ぎない。しかし、もし多

くの人に共通して左右の意味づけが脳にあるとするならば、都市における店舗の空間配置にも、長年の間にそれが反映されるようになっても不思議ではない。また、脳における左右の意味づけは人類に共通するだろうから、日本以外の場所でも同じような現象がみられるだろう。本稿では、そのような観点から都市のあり方を記述してみたい。

小谷(2007)によれば、都市の形態上の差は技術的・経済的・軍事的な観点から説明が可能であることを論証している¹⁾。「日本における都市論の多くは、ヨーロッパ都市と日本都市の具体的な形態上の差を曖昧で多義的な哲学的・思想的・精神的相違によって説明しようとし、結果として「非科学的な方法が正統的なアプローチ」とされてきた。「非科学的な社会理論は多くは政治的プロパガンダ」であり、都市論もその一例である。「都市論は、欧米流建築技術を学んだ建築家が自分たちの活動領域や自分たちへの需要を増し、施主や世間一般に対して自分たちの主張を押し通すのに都合の良い土壌を作り出すためのパブリックリレーションである。」以上の内容を小谷(2007)は述べている。本稿では、小谷の指摘も踏まえながら、技術的・経済的・軍事的な観点ほど直裁的ではないが、左右の意味づけの違いによる都市論を記述し、都市計画に際しての考慮を促すものである。

以下、〔 〕では東京、大阪、京都、名古屋という大都会や、札幌、仙台、広島という地方中核都市、および福島、新潟、岐阜、和歌山、姫路、高松、大分という地方都市を例にとり、人の主たる流れと店舗配置について記述する。街のとりあげ方は筆者の主観によるので、主張に都合のよい選択になりやすい。そこで、北海道のすべての市を対象に検討してみる。北海道の都市を取り上げるのは、(1)一つにまとまった地域であること、(2)明治以降に開拓された街であり、昔の盛り場がないので鉄道駅が地理的条件によってのみ決定され、その後の街の発展が鉄道駅を中心に展開していること、による。

〔 〕では、左右の位置の意味を座席の例およびその他いくつかの例を挙げて述べ、脳的作用によるものではないかという推測のための状況証拠とする。これは鈴木(1999)で記述したことの紹介および若干の補足である。

〔 〕では、二十世紀の都市計画思想としてオルムステッド、ハワード、コルビュジェ、ジェイコブスを取りあげ概観する。〔 〕では、わが国における都市計画の実施例として多摩ニュータウン、筑波研究学園都市、および郡山市を取りあげる。そのさい都市計画思想が実施例にどのような影響を及ぼしているのか、また、私の論点からみて何が足りないのかを記述する。

〔 〕は本論文における主張のまとめで、人間の脳で感じる自然な生理を反映させた都市計画の必要性を記述する。

〔 〕街における空間配置

(1) 地方都市

1. 福島

駅東口が表玄関になる。人の主たる流れは駅前通りであり、すぐ右角に地元の中合百貨店がある。駅前通りを250m進むと国道13号線に交差する。自動車交通としては駅前通りよりも一つ右にある平和通りがメインになる。駅前通りを600m進み右折すると県庁に突き当たる。県庁は福島城跡に造られた。その後背は阿武隈川である。駅前通りの左側に並行する文化通り、さらに左側の中央通りが繁華街になる。中央通りには飲食店、スナック・バーが連なり、駅前から県庁通りまで600mの歓楽街をなしている。したがって、人の主たる流れの右方向に正統的な建物が、左方向に非正統的な歓楽街が配置されている。

2. 新潟

古町のある島が昔からの新潟の街である。新潟駅のあるところは明治の頃までは沼垂町と呼ばれており、信濃川を挟んで島とは対岸にあった。昔と今では人の主たる流れが変化しているので、左右という観点から店舗配置をみることは複雑である。昔の新潟の街は、信濃川に沿って川下に進むのが人の主たる流れであった。そのさい、信濃川が一番近いのが表通りであり、そこに大店があった。旅館等の歓楽街は、川から離れた古町通にあった。いまは新潟駅から万代橋を渡って古町の方に進んでいくのが人の主たる流れになっている。その右手方向の古町に料亭街があることになる。

時代を経て、いまでは昔の歓楽街が格式ある表の顔になっている。現在は万代橋を渡って左手方向にいかかわしい客商売の店がある。

3. 岐阜

JR 岐阜駅と隣接する名鉄新岐阜駅を起点として長良橋通り(国道256号線)を進むのが人の主たる流れになる。駅から800mで徹明町の交差点に来る。その左先が繁華街の柳ヶ瀬地区である。長良橋通りを1.5km先まで行くと市役所がある。繁華街は長良橋通りの左側で、徹明町通り(国道157号線)と若宮町通りに挟まれた300mの間にある。長良橋通りの左側300mのところと並行している金華橋通りまでがメルサ、高島屋等の正統的な店舗が並ぶ地域になる。金華橋通りよりさらに左側の地域は柳ヶ瀬通を中心にスナック等がある歓楽街を形成している。

4. 和歌山

JR 和歌山駅と南海電鉄和歌山市駅の2つが主要駅であり、両者は2.5km離れている。その間に和歌山城がある。城の方向に本町通を城北通からけやき通に向けて進むのが人の主たる流れになる。その左側に並行する築地通も明るい商店街である。本町通を人の主たる流れとみなしたが、これは象徴としての意味合いが強い。人びとは城への方向が主たる流れだと意識している。しかし、実際に人通りが多いのは本町通に直交しているブラクリ丁である。ブラクリ丁を本町通から築地通に向かい、さらに和歌川にかかる雑賀橋を渡って進んだところに歓楽街がある。渡った河岸沿いにソーブランドが数軒ある。ブラクリ丁をさらに進むとバーやキャバレーといった店舗があり、さらに先にはスナックが点在している。したがって、本町通を城に向かう流れの左方向に歓楽街があることになる。

5. 姫路

駅から城に向かう大手前通りがある。それと並行して一筋右側にアーケード街の「みゆき通り」があるが、これが人の主たる流れになる。大手前通りには銀行等の店舗があるが、その右側に並行するみゆき通りや、さらに右側の小溝筋が買い物

街になる。みゆき通りは明治天皇の行幸に際し整備された。その当時は大手前通りは存在しなかった。その後、大手前通りが建設され、みゆき通りは歩行者のための商業空間になった。歓楽街は大手前通りを400m進み左折した魚町通りを中心に魚町、塩町、福中町にある。

6. 高松

瀬戸内海に面した高松駅近辺から、海を背にして中央通りを約2km先に進むと栗林公園がある。これが人と車の主たる流れになる。中央通りより一つ右側の通りを駅から1km先に進むと県庁や市役所があり、官庁街をなしている。中央通りが整備される以前はこの通りが人の主たる流れであった。中央通りと並行し左側にある丸亀通りと、さらに左側のフェリー通りに挟まれた幅約300mの区域に歓楽街がある。歓楽街は兵庫町から常盤町まで1kmも続いている。人の主たる流れの左方向に歓楽街があるという点では典型的な街を形成している。ただし、起点となる高松駅およびそれに隣接した玉藻公園(高松城跡)が近年整備され明るい空間になったが、10年ほど前までは場末の様子を呈していた。高松の誇りは城ではなく、別荘地である栗林公園なのだ。城の堀端は琴電の線路が敷設されていて、直接触れることもできない。高松市民の複雑な感情の表現としてみることもできよう。

7. 大分

駅前の昭和通りが人の主たる流れである。駅から600m進むと197号線と交差する。197号線に沿って右折し150m進むと市役所がある。さらに150mのところで大分城跡公園がある。県庁は197号線を挟んで公園の前にある。昭和通りの左方向にある中央町、都町に繁華街がある。手前にある中央町には主として飲食街が、その先の都町にはスナック街がある。

(2) 地方中核都市

1. 札幌

札幌駅南口が表玄関である。ただし、街は駅前通り(西4丁目通り)を中心としてではなく、それと直交する大通公園を主体につくられた。大通

公園を西1丁目から北海道神社のある円山公園に向かうのが人の主たる流れになる。ただし、この流れは象徴としての意味合いが強い。主たる流れの右方向で西5丁目のところに道庁がある。札幌を代表する正統的な建築物である。歓楽街は大通公園を西に向かって進む主たる流れの左方向にある。南4条西4丁目にあるすすきの駅を起点に、南5条・6条、西5丁目・6丁目が薄野といわれる歓楽街である。

2. 仙台

仙台駅から城に向かう青葉通が車のメインの流れにはなるが、人の主たる流れではない。青葉通より一つ右側に並行する道路がアーケード街であり、クリスロードさらに先がマーブルロードと呼ばれている。人は主にそこを歩いている。その道路を駅から600m進むと左角に地元デパート藤崎がある。そこを右折し県庁の方に進む一番町街が賑やかな繁華街であり、人の主たる流れになっている。一番町街を藤崎から200m進むと広瀬通になり、そこを横切ってさらに400m進むと定禅寺通に来る。その手前に三越、141ビルがある。定禅寺通を横切って進むと県庁、市役所等の官庁街がある。一番町街の左側で広瀬通と定禅寺通に挟まれたところが国分町である。そこに歓楽街がある。歓楽街の店舗配置は、一番町街に並行してすぐ左側にある通りに飲食店街があり、さらに左側の国分町通にスナック・バー街がある。さらに左側の晩翠通を越えた立町にホテル街がある。

3. 広島

駅から800mで京橋川にかかる稲荷大橋に来る。川を渡ってから原爆ドームの方向に向かう相生通りが人の主たる流れになる。稲荷大橋から500mで八丁堀交差点に来る。角に三越、天満屋、福屋というデパートが並んでいる。相生通りをさらに500m進んで紙屋町交差点に行く流れと、八丁堀交差点を左折して中央通りを進む流れとがある。紙屋町交差点を右折すると県庁があり、その先に広島城がある。したがって、相生通りの右方向に正統的な建物が配置されている地区がある。繁華街は相生通の左方向にある。八丁堀交差点で左折して中央通りを進む流れでみると、紙屋町に近い右

地区の方に表の顔になる銀行、ホテル、飲食店等があり、薬研堀を中心とした左地区にはスナック、ソープ街がある。

(3) 大都市

1. 東京

街における店舗配置は、人が歩くことを基本にしている。中心市街地は大きくても、歩いて30分ほどで端から端まで行くことができる。したがって、2km平方を想定すれば、その中に含まれるであろう。東京特別区は人口800万人であり、1つの中心市街地に納めるには無理がある。いくつかの中心市街地に分けられると考えるべきであろう。その意味で、東京特別区は街の連合体からできているとあってよい。山手線に沿った繁華街としては銀座、新宿、渋谷、池袋、上野等が挙げられる。山手線内では赤坂、六本木があり、山手線外には浅草がある。ここではJR駅が起点となる新宿、渋谷、池袋について記述しよう。銀座は有楽町駅に近いが、人の主たる流れの起点が駅にあると明確には判断できないので除外する。

新宿は東口が表玄関になる。西口は淀橋浄水場跡地を中心に超高層ビルが建ち並ぶ街になっているが、店舗機能が自然に張りつくまでには街の成熟をみていない。東口を出てスタジオアルタを起点に駅前通りを進むと、三越や伊勢丹というデパート、あるいは各種店舗が入ったビルが並んでいる。その通りの左側に並行してある靖国通りを横切ったところに歌舞伎町があり、大きな歓楽街を形成している。したがって、人の主たる流れの左方向に歓楽街がある。もっとも、主たる流れの右方向に正統的な建物が配置されているかという点を見ると、普通の意味では歓楽街と言ってよい。ただし、歌舞伎町にある店舗よりはいかがわしくなく、正統的な飲食店と言ってよい。近年は、さらに右方向で南口と呼ばれるところに高島屋のビルができて、人の流れが少し変わった。

渋谷は八千公前を起点にすべきであろう。交差点を渡ると109ビルがある。右の文化村通りを進むと東急百貨店に行く。文化村通りの右側に並行しているセンター街は若者であふれる歓楽街である。八千公前からみて右方向には西武百貨店やマルイがある。そこを道なりに上っていく公園通りには

渋谷区役所があり、その先にNHKの建物がある。その意味で八チ公前からみて右方向に正統的な建物が配置されていると言える。それに対し、109ビルの左側にあたる道玄坂と右側の文化村通りとに挟まれた扇形の地域は円山町といわれ、ラブホテル街を形成している。渋谷は全体が歓楽街といってもよいが、八チ公前を起点にして、右方向が正統的、左方向が非正統的な店舗が配置されていると言ってよい。

池袋は左右という点からは判断のつかない街である。以前は山手線外側の西口が表玄関であった。ところが東口の方にあった巢鴨刑務所(のちの東京拘置所)を取り壊し、1978年にサンシャインシティが建設されオープンした。人の流れは急速に変化し、いまでは東口の方が表玄関といってもよいほどになった。西口を出てからの街路は混乱しているように感じられる。もともとは東西南北に区画されていた地域に斜めに山手線が横切り、駅が設置された。その駅にあわせて駅前通りがつけられ、駅からみて左地区の街路が整備された。街における方向感覚が狂ったのであろうか。西口を出て右方向に飲食店やスナック、さらにはラブホテル街が形成されている。といて、左方向に立派な施設が配置されているというわけでもない。東京芸術劇場やホテル・メトロポリタンがあるが、その周辺も薄汚い雰囲気を漂わせている。東口の方は、駅をでると並木のある広い街路がまっすぐに延びている。ただし、人の流れはすぐに斜め左方向のサンシャイン通りへと進んでいく。歓楽街というよりは、多くの若者が歩いている繁華街といった方が適切であろう。飲食店や各種店舗があるが、いかがわしい店舗は少ない。

2. 大阪

大阪は北と南の2つの街に分かれる。北は大阪駅(梅田駅)を起点として御堂筋を南に進むのが主たる流れになる。しかし、これは象徴的な意味あいとして言えることである。実際には御堂筋に行くのは車であり、人は広く張り巡らされた地下街を歩くことになる。歓楽街は、駅から御堂筋を進んでいく左方向にあたる曾根崎を中心とした地域にある。

南の中心は心齋橋から道頓堀にかけての地域に

ある。人の流れは心齋橋筋がメインになる。ただし、流れの方向は2つあり、難波駅から北の道頓堀に向かうものと、地下鉄心齋橋駅から南の道頓堀に向かうものがある。心齋橋、道頓堀を中心としたところが大阪で一番の繁華街であり歓楽街になる。心齋橋筋を中心に少し離れた両サイドにラブホテル街がある。したがって、大阪ミナミは人の主たる流れが両サイドから一点に集まってくるという意味で特異なケースである。

3. 京都

日本史では、平安京は大内裏と羅城門を結ぶ朱雀大路を中心に碁盤目状に造られていた、と教えられている。現在、大内裏も羅城門も存在していない。現存する京都御所は大内裏があった場所より東に2km弱離れた所に位置している。平安京時代の京都と中世以降の京都は別の街であると考えた方がよい。とくに天下統一をした豊臣秀吉が行った京都大改造は平安京とはまったく異なる発想であった。すなわち、左京地域を街として、それを囲む御土居を構築した。その中を洛中とし、その外側を洛外として分離した。平安京では、羅城門から朱雀大路を通って朱雀門へ向かうのが街の軸になっている。御土居に囲まれた京都の街の軸は洛中洛外図等から判断すると、四条通りを中心に祇園に向かう方向で構成されていた。そこに京都の街の賑わいがあった。江戸時代には三条から五条にかけての鴨川東地区が遊所としての賑わいを見せた。東海道の起点となる三条大橋東詰、南の玄関口で伏見街道の起点となる五条橋東詰、および四条通の祇園町には多くの旅籠屋があった。水茶屋・料理茶屋・焼豆腐などの飲食業は、四条通を中心に大和大路(縄手通)・川端筋に展開して遊客を誘っていた。寛文10年(1670年)の鴨川堤の大規模改修によってこの地域の都市化が進展し、祇園外六町や祇園内六町という新開地が茶屋町として発展した。これにより祇園一帯は京都最大の遊所・遊里に発展し、伝統的な権威を誇っていた島原は相対的に地盤低下を示した。現在の京都の街はこの流れの延長線上にある。

京都の街は四条通を烏丸から祇園に行くのが人の主たる流れである。鴨川を渡って左の地区で、四条通と新橋通に挟まれた地域に歓楽街がある。

ただし、よりいかがわしい店舗は鴨川沿いの川端通からひとつ入った縄手通に並んでいる。そこから東にある花見小路通までの白川沿い周辺は風情ある茶屋や料理屋が並んでいて観光地になっている。その先の花見小路通から東大路通までにスナックやバーが密集している。ただし、東大路通は主要通りであり、先は知恩院になっていて、その周辺にいかがわしい店舗はない。

4. 名古屋

名古屋における人の主たる流れは判然としにくい。繁華街は中区栄（通称、栄町）にあると言ってよいであろう。人の主たる流れは、広小路を納屋橋から栄に向かう方向であると考えられる。象徴的意味あいとしては、名古屋城と南の熱田神宮とを結ぶ道がメインとみなされてきた。しかし、城下町や門前町の場合、象徴的意味あいの道ではなく、それと直交する通りが繁華街になりやすい。和歌山の場合にはブラクリ丁であり、名古屋では広小路である。明治になり、鉄道駅が広小路を延長し堀川を渡ったところにある笹島に設置された。したがって、笹島から納屋橋を渡り栄に向かう広小路が人の主たる流れになったと考えられる。昭和になり、笹島にあった駅は400m北の現在に位置に移された。駅前には桜通になるが、これが主たる流れにはなっていない。依然として広小路にあるとみなされる。ただし、名古屋駅からの流れは明確ではない。したがって、納屋橋を起点に考えるのが妥当であろうか。あえて言えば、納屋橋から本町通あたりまでがビジネス街、本町通から久屋大通までが商業街である。

名古屋では城と熱田神宮を結ぶ南北の通りが重要であった。現在でも象徴としての意味をもっている。それを体現しているのが久屋大通である。人の流れとしては久屋大通に並行する大津通がそれにあたり、矢場町から栄に向かう流れが考えられる。大津通にはデパートが並び、表の顔をなしている。メインの流れである納屋橋から栄に向かう広小路と、サブの流れである矢場町から栄に向かう大津通を考慮すると、繁華街は大津通の左側で、広小路を中心に左右に配置されることになる。ただし、広小路を栄に向かった右方向の地域には比較的明るい飲食店街があり、左方向の地域には

本格的な歓楽街があることになる。そのため、広小路から離れ桜通に近づくにつれ、ヘルス等のいかがわしい店舗が並ぶことになる。

(4) 北海道の都市

現在、北海道には34市ある。表1では、人の主たる流れと歓楽街の位置について記述している。未調査の市もあるし、人の主たる流れが判然としない市もある。歓楽街の位置が主たる流れの左方向にあるか、右方向にあるかという観点からまとめると、次のようになる。

左方向：札幌，函館，小樽，旭川，室蘭，釧路，北見，岩見沢，網走，苫小牧，稚内，美唄，芦別，江別，士別，名寄，千歳，滝川，砂川，深川，登別，伊達（22市）

右方向：帯広，留萌（2市）

判別不能：根室，富良野，恵庭，北広島（4市）

未調査：夕張，赤平，紋別，三笠，歌志内，石狩（6市）

判別不能と未調査の市を除くと、24市のうち22市、92%の都市において歓楽街が左方向にある。左方向にあると判断したが少し疑問の残る小樽，網走，士別，伊達を除いてカウントすれば、20市のうち18市、90%の都市になる。稚内のように、歴史的にみてこないと判断しにくい都市もある。それらを除いて考慮しても、8割以上の都市で歓楽街は左方向にある。したがって、統計的処理をするまでもなく、歓楽街の位置は人の主たる流れとは無関係であるという仮説を棄却し、左方向にあると主張してもよいであろう。念のため、歓楽街が左右同じ確率であるという帰無仮説のもとで20市のうち18市以上左方向にある確率は0.0002である。

(表1) 北海道都市の中心市街地における人の主たる流れと歓楽街の位置

都市名	2005年国勢調査		左右の位置	主たる流れと街の顔になる場所	歓楽街の場所
	人口	集中地区人口			
札幌市	1,880,863	1,812,362	左	札幌駅南口の方が主である。ただし、街の作りは駅前通りを中心ではなく、それと直交する大通公園を主につくられた。1丁目から北海道神社のある円山公園に向かう流れがメインである。その右手5丁目のところに道庁がある。	大通公園を1丁目から西に向かって進むメインの流れの左方向に歓楽街がある。南4条西4丁目にあるすすきの駅を起点に、南5条6条、西5丁目6丁目と薄野といわれる歓楽街になる。
函館市	294,264	251,552	左	街が駅付近と五稜郭付近の2つに分かれる。駅付近は駅前から松風町交差点に向かう400mがメインの流れ。その右方向の地域に日銀や市役所がある。駅右脇が朝市のたつ市場になっている。五稜郭は駅から4km離れている。中央病院前から丸井今井の角を右折するのがメインの流れである。	駅付近では、メインの流れである国道278号線の左方向にある松風町に歓楽街がある。ただし、松風町交差点を大森海岸の方向に直進した右方向にもスナックが点在する。五稜郭付近では、中央病院前から丸井今井へ向かう道を1つ左に入ったところに小料理屋、スナックが点在する。
小樽市	142,161	122,971	左?	札幌への物資の輸送拠点および北海道の金融の中心として港から栄えた。従って、昔は小樽運河から日銀等の建物がある通りがメインの流れであった。いまはレトロな建物が並び観光地になっている。現在のメインの流れは小樽駅から海岸に向かう中央通りを100m行き、右折したセントラルタウン都通である。	小樽運河から日銀に向かう通りの1つ左の通りが「すしや通り」と呼ばれ、観光客相手の飲食店が並び、さらに左方向で函館本線の高架を越えた花園1丁目とスナック街がある。現在の流れからみると、セントラルタウンを数百メートル行った先にあり、左右という説明はつきにくい。
旭川市	355,004	326,780	左	駅前の平和通買物公園がメインの流れ。500mで国道39号線と交差する。自動車道路は平和通を挟む緑橋通(20号線)と昭和通である。	歓楽街は平和通の左側から昭和通を越えたところにある。いわゆる「さんろく街」と呼ばれる3条通6番には飲食店・スナックが密集する。
室蘭市	98,372	80,623	左	街は室蘭駅と東室蘭駅とに分かれる。昔は札幌への物資の中継拠点として賑わった。従って港から発展した街である。札幌街道を室蘭駅の方に向かってるのがメインの流れであったが、現在は駅前の流れがはっきりとしない。寂れてしまったことも一因か。東室蘭は駅前通を700m行って知利別川を渡った左右にある丸井今井、長崎屋が中心街になる。	札幌街道を室蘭駅に向かってきて左手にあたる中央町2、3丁目に飲食店・スナックがある。駅からみると、左右どちらとも言えない。東室蘭はメインの流れの左方向で、長崎屋の裏手になる中島町1丁目あたりにスナック街がある。
釧路市	181,516	165,175	左	駅から斜め左方向に行く北大通がメインの流れ。600mで国道44号線と交差する。その手前右方向に市役所等の官庁がある。	駅から北大通を直進し国道44号線を越え釧路川にかかる幣舞橋にいく道の左地区が歓楽街になる。未広町・栄町5～2丁目にあたる。
帯広市	170,580	154,044	右?	駅を出て西2条をいく銀座通がメインの流れになる。600mで藤丸デパートにくる。自動車のメイン通りは250m右に並行する大通(国道236号線)である。	飲食店・スナック街は銀座通の右側に並行する西1条を中心にある。線路と街路が45度に交わっているため、歓楽街が左方向では駅から遠くなる。それで歓楽街が右にずれたのではない。
北見市	110,715	85,202	左	駅前に鉄道と並行して国道39号線が走っている。駅前左にある東急百貨店から出て39号線と直交する銀座通りがメインの流れ。39号線に並行して一番街、二番街があるが、それが商店街をなす。	駅前から銀座通りを600m行くと、区画が45度回転しており、道が二手に分かれる。その左方向に飲食店・スナックが点在する。

都市名	2005年国勢調査		左右の位置	主たる流れと街の顔になる場所	歓楽街の場所
	人口	集中地区人口			
夕張市	13,001	-	?	未調査	
岩見沢市	83,202	56,492	左	駅から出て300mで四条通りに入る。そこを左折して西6丁目から西1丁目、中央通りに向かうのがメインの流れ。駅前通を直進し800m行ったところに空知市庁舎や文化センターがある。	4条西6丁目から中央通りに向かうメインの流れの左地区にスナック街がある。とくに2条、3条の西2丁目、1丁目付近が中心である。
網走市	42,045	29,703	左?	網走駅が人の流れの起点ではない。網走川を1km下手に行ったところに街の中心がある。駅が起点ではないのでメインの流れは分かりにくい。強いて言えば、中大通(244号線)を川下からきて、網走中央病院で右折し中央通(国道39号線)を網走橋に向かうのがメインの流れである。	中央通を網走橋に向かう左方向である西1丁目と南5条～3条にスナックが点在する。
留萌市	26,826	21,382	右	メインの流れは複雑である。駅から出て150mを右折、さらに130m先を左折し、北8条通りを500m先の錦町3丁目交差点まで行く。そこを右折して国道231号線を進む道がメインの流れになる。	歓楽街は北8条通りの右手、さらに錦町3丁目交差点を左折して国道231号線を直進しても右手方向にあたる開運町2丁目、錦町1丁目にある。
苫小牧市	172,758	136,983	左	駅前から出る立派な道路(19号線)がメインではなく、その右側に並行するでシンボル・ストリートがメインの流れである。それを650m行くと一歩通りに交差する。そこを右折して進む大町銀座ストリートが昔からの商店街である。苫小牧は王子製紙の城下町であり、メインの流れの右地区に王子製紙の敷地がある。	大町銀座ストリートを200m進む。そこから、その1つ左手の路地を中心に200mの区間に飲食店・スナック街が点在する。
稚内市	41,592	34,011	左	稚内の街は北に向かう鉄道に並行して国道40号線、北浜通、中通、106号線とある。昔は北浜通を海に向かうのがメインの流れであった。北浜通の中央3丁目区間200mがアーケード街になっていて表の顔になる。駅を中心に考えると、アーケード街は左方向になってしまう。観光客の街であり、しかも観光客は連絡船ですぐに島に渡ってしまい商店街を見ることもない。従って、駅からの流れをメインとはみることができない。	北浜通を駅に向かうのがメインの流れとすると、その1つ左側の中通で、駅を越えた地区240mを中心に飲食店・スナックが点在する。
美唄市	29,083	13,092	左	北に向かう鉄道に沿って150m左側に国道12号線が並行して走り、街中を抜けていく。メインの流れは駅から国道12号線に出て左折し、60m先を右折して市役所に向かう栄通である。その右方向にコアビバイ、さらに右の中央通りに空知信金や郷土資料館の建物がある。	栄通を市役所に向かう左方向で、小川を渡った銀座街にスナックが点在する。
芦別市	18,899	9,286	左	駅前通りを180m行くと国道38号線にぶつかる。120度に交わる国道を左手に20m行き右折し、市役所に向かう国道452号線がメインの流れになる。	駅を出てすぐ左方向にある北1条西1丁目の地区にスナックが点在する。

都市名	2005年国勢調査		左右の位置	主たる流れと街の顔になる場所	歓楽街の場所
	人口	集中地区人口			
江別市	125,601	111,684	左	江別駅ではなく札幌に近い野幌駅の方に中心街がある。駅を出て左に100m 行き、鉄道と直交する370号線を300m 行くと国道12号に交差する。それがメインの流れである。	370号線より1つ左側の道に沿って飲食店・スナックが点在する。
赤平市	14,401	7,444	?	未調査	
紋別市	26,632	18,031	?	未調査	
士別市	23,411	12,864	左?	駅前の南大通を350m 行くと国道40号線と交差し、それを左折して300m 行くと中央通に交差する。それがメインの流れである。中央通を右折して800m 行ったところに市役所がある。かつては駅前通が中心であったが、1970年代以降、国道西側が衰退し、東側に比重が移った。	飲食店・スナックが点在するのは2カ所ある。1つは南大通と国道40号線に沿うメインの流れの左方向にあたる大通西7, 8丁目にある。もう1つは、国道東側の寿通と東1条通にある。後者の方が賑わっている。前者の位置は左方向と言えるが、後者は言えない。
名寄市	26,590	20,258	左	駅を出て鉄道に並行する大通を横切り、駅前通(南7丁目)を500m 行くと国道40号線に交差する。その手前400m のところにある3条通を右折するのがメインの流れである。3条通の200m にわたる区間が主たる商店街になる。	駅前通に並行して1つ左側100m にわたって飲食店・スナックが点在する。さらに、メインの流れに沿って進む3条通と、左側に並行する国道40号線(4条通)の間に「ぎおん通」がある。そこが街一番の歓楽街になる。国道40号線を横切って左方向にある錦通にも飲食店・スナックが点在する。
三笠市	11,927	-	?	未調査	
根室市	31,202	18,276	?	メインの流れが判然とはしない。昔は根室港が街の起点であったと思われるが、現在は駅であろう。駅前通は200m で国道44号線に突き当たる。そこを右折し350m 行くと313号線に交差する。左折して港に向かう道がメインか。人の流れとしては、313号線の一筋手前にあるときわ商店街に行くか、あるいは、それと直交する緑町通を1丁目から3丁目に向かうのがメインかもしれない。	スナック街は本町2丁目、梅ヶ枝町2丁目を中心にある。ときわ商店街通の流れや、緑町通の流れから見れば左方向と言える。しかし、メインの流れが判然としないので、判断はできない。
千歳市	91,437	71,940	左	駅前通(国道337号線)を500m 行くと仲の橋通に交差する。そこから国道36号線に交差する400m の区間が表の顔である。人の主たる流れは、130m 左側を並行するニューサンロードと呼ばれるアーケード街である。	歓楽街は、ニューサンロードの左側70m に並行する公園通を中心にして、さらに70m 左のギオン通にもある。
滝川市	45,562	33,564	左	駅を出て左手斜めに行く道に主たる商店街がある。600m 行くと国道38号線にぶつかる。右折して70m で国道12号線と交差。そこを左折していくのがメインの流れになる。国道12号線からみて右手に市役所や市立病院がある。	国道12号線の左方向にある本町1丁目、2丁目を中心に飲食店・スナック街がある。
砂川市	20,068	10,100	左	北に向かう鉄道に並行して左側150m のところに国道12号線が街を抜けていく。駅から出て国道12号線に突き当たり、左折して30m で右折し、市役所に向かうのがメインの流れである。	国道12号線から市役所に向かう道に入って60m のところを左折する。170m でパンク歌志内川を渡る。その先が柳通りといわれ、スナックが点在する。

都市名	2005年国勢調査		左右の位置	主たる流れと街の顔になる場所	歓楽街の場所
	人口	集中地区人口			
歌志内市	5,221	-	?	未調査	
深川市	25,838	11,811	左	駅前通りを200m行くと国道233号線に交差する。さらに直進して石狩川に架かる深川橋に向かうのがメインの流れである。	駅を出てすぐ左方向にある2条9丁目にスナックが点在する。
富良野市	25,076	14,535	?	駅左手すぐにある日の出町2丁目交差点のところから中央通りの方向へ行く相生通がメインの流れになる。そこが「北海へそ祭り」会場である。ただし、日の出町の交差点で相生通と直交する五条通を整備しシンボルにしようとしている。	相生通からみると一筋左の通りに直交する日の出町12番地にいづかのスナックがある。ただし、きれいなイメージで売り出している観光地なので、歓楽街はない。
登別市	53,135	40,306	左	幌別駅から中央町1丁目と2丁目の境を通る駅前通を200m行くと327号線に交差する中央町6丁目交差点である。それを進み来馬川にかかる相生橋を渡っていくのがメインの流れである。中央町6丁目交差点を左折し150m行ったところに市役所がある。	駅を出て左手方向のすぐのところにある中央町2丁目にスナックが点在する。
恵庭市	67,614	58,772	?	メインの流れは定かでない。強いと言えば、駅前通を500m行き、右折して400m進むと市役所に至る恵庭大通りを表の顔として街の設計をしている。ただし、恵庭大通りに人通りはない。車のメイン通りは室蘭街道(46号線)で街中を抜けていく。	スナック街は恵庭大通りを市役所に向かう左方向の栄恵町にある。メインの流れを恵庭大通りとすれば左方向になるが、メインの流れがはっきりしないので判断はできない。
伊達市	35,223	22,000	左?	伊達紋別駅が街の中心ではない。1km離れたところで、779号線と982号線が交差するところが中心になる。現在はそこに時計台が象徴として築かれている。時計台を起点とし四方に流れがある。その中で北方向にある市役所通商店街が表の顔である。南方向に網代町商店街、東方向に南大通商店街、西方向に鹿島商店街がある。昔は浜が起点で網代町に向かう流れがメインであった。	スナック街は錦町にある。海岸近くで、紋別川の左岸付近の地域である。昔のメインの流れである網代町商店街を市役所の方に向かう流れからみれば左方向にあると言える。現在のメインの流れがはっきりとはしないので、判断はしにくい。
北広島市	60,677	50,813	?	メインの流れが判然としない。	札幌郊外の住宅都市であり、歓楽街はない。市役所周辺には何軒かスナックがある。
石狩市	60,104	43,048	?	未調査	

(5) 店舗配置²⁾

店舗配置が右地域と左地域でどのように違うかをみるために、人口の大小も考慮して茨城県の3

都市を選んで比較した。人口25万人の水戸市、13万人の土浦市、5万人の石岡市であり、表2がその結果である。

(表2) 右地域・左地域の店舗数

NTTタウンページ1999年版より作成

業種	水戸		土浦		石岡	
	右	左	右	左	右	左
デパート・スーパー	7	1	6	0	3	0
銀行	22	2	9	1	7	0
シティホテル	9	5	2	0	2	2
旅館	4	7	3	6	2	3
ブティック	60	12	10	0	1	1
洋服・靴	183	25	79	6	19	7
映画館	2	3	3	0	0	0
カラオケ・パチンコ	14	3	9	0	1	1
レコード・玩具	10	2	5	2	3	0
美容理容店	71	38	47	14	17	15
銭湯	0	0	0	1	1	0
コンビニ	8	4	6	0	1	0
薬・日用品	40	20	28	7	14	6
パン・菓子屋	12	3	8	1	3	1
肉魚野菜	23	13	14	2	7	4
酒屋・米屋	12	16	8	7	14	7
弁当・仕出	12	3	2	2	3	1
洋風レストラン	7	3	4	0	0	0
ファーストフード	9	2	7	0	3	0
喫茶店	44	19	14	6	7	2
喰物屋	60	29	21	9	15	9
居酒屋	27	40	19	17	1	5
和風料理屋	41	78	15	14	5	5
中華・焼肉	12	14	6	18	0	3
飲食店	16	51	23	71	7	11
スナック	24	480	29	124	6	21
キャバレー	0	3	0	1	0	0
ソープランド	0	17	0	30	0	0
ラブホテル	0	7	1	1	0	0
計	729	900	378	340	142	104

デパート等の大規模小売店舗や銀行は、ほとんどが右地域に立地している。ブティック、洋服、靴等の衣類関係は、その6～8割が右地域にある。とくに大きな都市になるほど、右地域に多くなる。街の中で正統的な地位を占める業種であり、都市が大きくなるに従って全体に占める店舗数の割合も多くなるので、右地域に立地する割合が多くなるのであろう。映画館、カラオケ、ゲームセンター等は比較的多く右地域にある。若者を狙った娯楽産業は、明るい正統的な地域に配置されていると思われる。

肉屋、魚屋、八百屋、薬局、文具、電器店、美

容院、理髪店等は右地域に多いが、他の地域にもまんべんなくある。うどん・そば、とんかつ店、食堂、レストラン等の喰物屋や、喫茶店は右地域に多い。居酒屋は左地域に立地することが多くなる。和風高級料理店は、居酒屋よりもさらに大きな割合が左地域に立地している。これは旅館の立地に似ている。飲食店、小料理屋、中華、焼き肉等は左地域に多くある。スナックは圧倒的に左地域に多い。ソープランドは左地域にしかない。ラブホテルは左地域に多くある。しかし、地方都市においては、大多数は中心市街地から離れた国道沿いの方にある。

飲食関係の業種は、表2で列挙した順に右地域に多くあるものから、左地域に多くあるものへ変化していく。また、街の中における正統性は列挙した順に低くなる。それに従って、左地域の駅に近い場所から、次第に遠い場所に立地する割合が多くなる。ソーブランドが街の場末をつくる。その地域を過ぎてスナックが少しあり、歓楽街は終わる。その先は住宅街になっている。

〔 〕 左右の位置の意味

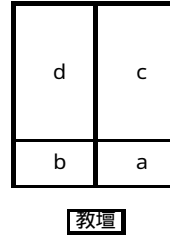
街における店舗配置がなぜ「人の主たる流れ」と関連してくるかについて、傍証的な記述をする。たぶん、これは左脳、右脳の機能の違いを反映した結果だと推測するが、それを証明する手だてを持っていない。そこで、座席の位置、絵画の構図等を検討し、左右という点に関し、街における店舗配置と共通なものがあることを記述しよう。

(1) 座席の位置

自分の位置づけがよく分かるような集団を考える。20~50人くらいの集団を想定すればよいであろうか。たとえば語学授業のクラスであるとか、教授会とかである。クラスであれば同じ年齢層の集団であるが、そのなかで理解力が優れていると思われる人もいれば、そうでない人もいる。社交的な人もいれば、そうでない人もいる。教授会では年齢幅が広く、長老と呼ばれる教授もいれば、若手の准教授もいる。それぞれが集団の中で自分がどの位置づけにいるかを暗黙のうちに感じとっている。このような場合、授業や会議で坐る位置がおのずから決まってきたりする。

主として2年次対象の統計学の最初の授業で、座席位置についてアンケートをとった。1年次に受講した数十人のクラス授業である語学科目を想定し、図1のどこに坐っているかを訊いた。教室を前後左右の4つに区分する。前から3列目までを前列、それ以降を後列とする。また、教壇からみて右方向を右側、左方向を左側とする。前右をa、前左をb、後右をc、後左をdとする。ここで、教壇からみて右側に坐る学生は、その学生から教壇をみても、教壇が右方向に見えることに注意。同様に、左側に坐る学生には教壇が左方向に見える。

(図1) 座席位置



(表3) 座席位置と出席回数

		出席回数			計
		多い	普通	少ない	
座席位置	a	135	47	108	290
	b	170	92	103	365
	c	302	204	372	878
	d	288	191	304	783
	計	895	534	887	2316

座席位置別出席回数(%)

		出席回数			計
		多い	普通	少ない	
座席位置	a	46.6	16.2	37.2	100
	b	46.6	25.2	28.2	100
	c	34.4	23.2	42.4	100
	d	36.8	24.4	38.8	100
	計	38.6	23.1	38.3	100

(表4) 座席位置と成績

		成績の偏差値				計
		65以上	50~65	40~50	40以下	
a	24	36	40	13	113	
b	9	44	46	17	116	
c	25	115	116	37	293	
d	21	121	100	38	280	
計	79	316	302	105	802	

座席位置ごとの成績分布(%)

		65以上	50~65	40~50	40以下	計
a	21.2	31.9	35.4	11.5	100.0	
b	7.8	37.9	39.7	14.7	100.0	
c	8.5	39.2	39.6	12.6	100.0	
d	7.5	43.2	35.7	13.6	100.0	
計	9.9	39.4	37.7	13.1	100.0	

データ：座席は1年次に受講した語学授業のでの位置を、2年次統計学の4月開講のときにアンケートをした。成績の偏差値は、1991~93、96年度統計学の前期試験の結果である。各年度ごとに偏差値を計算し、4年間の累計をだした。

(表5) 1991年度前期・内訳別得点

座席位置	計		内 訳					
	受験者数	平均得点	(A)		(B)		(C)	
			受験者数	平均得点	受験者数	平均得点	受験者数	平均得点
a	21	51.7	21	49.6	15	53.3	11	52.8
b	10	56.2	10	54.1	10	54.3	6	47.8
c	26	47.9	26	49.4	17	46.0	11	49.1
d	37	48.9	37	49.5	23	48.9	18	49.6
計	94	50.0	94	50.0	65	50.0	46	50.0

(A)：毎年出題される平均・分散の問題
 (B)：教科書から出題すると指示した問題
 (C)：教科書外の予告しない問題
 注：内訳別得点はそれぞれ平均50点に基準化されている。
 人数が異なるのは、それぞれの問題を解答した受験生のみを集計したから。

前期試験の成績と、後期にとった出席回数とのデータをもとに、座席位置との関係を分析した。用いたデータは1991, 92, 93, 95, 96, 99, 2000, 01, 02年度である。表3の座席位置と出席回数は、対象としたすべての年度のデータを用いた。年度によって、出席をとる回数が10~15と異なる。2~3回しか欠席していない場合を「多い」、3~4回しか出席していない場合を「少ない」、その中間を「普通」とした。

表4の座席位置と成績は、1991~96年度までのデータを用いた。1999年度以降は、この分析をするにはふさわしくない試験形式だからである。また、とくに前期試験のみを対象にして後期試験を除外したのは、後期試験は難しさのレベルが上がり、この分析にふさわしくないからである。出題は年度によって異なるので、得点を基準化して成績とした。基準化は年度ごとに平均50点、標準偏差10点として、いわゆる偏差値を求めた。表5の出題別内訳は、1991年度しか行っていない。

経験的に言うと、前右aに坐る学生は熱心で理解力がよい。前左bの学生は熱心だが理解力が遅い。あるいは、言葉のハンディーのある留学生がbに多い。後右cの学生は授業に消極的にしか参加してなく、理解しようとする事も少ない。後左dの学生は理解力の良し悪しに関係なく授業から逃避し、友達同士でおしゃべりしていることが多い。もちろん、これらは極端な表現だが、このような傾向が見受けられると感じた。

データからは、授業に熱心か否か、理解力がよいか否かということだけしか分からない。表3から、前列a, bに坐る学生は熱心であることがわかる。とくに出席回数が「多い」、「普通」までを比較すると、aよりもbの方がより熱心である。後列c, dに坐る学生は熱心さが足りない。あえてc, dを比較すれば、cに坐る学生の方がより消極的である。座席位置と出席回数は独立であるという帰無仮説のもとで適合度検定をすると、 $\chi^2 = 36.3$ であり、P値=0.00になる。したがって、座席位置により出席回数は影響される。

表4は、理解力に関するものである。偏差値65以上の割合をみると、前右aに坐る学生は21.2%であり、他と比較して極端に多い。偏差値50以上の割合は、aが53.1%, bが45.7%, cが47.8%, dが50.7%である。経験的に感じている傾向を裏づける数字である。

表5は、出題内容によって差があるのかをみる。1991年度前期の成績は、得点合計ではb, a, d, cの順である。内訳をみると、(A)毎年出題される平均・分散の問題、(B)教科書から出題すると指示した問題において、bの成績は良い。しかし、(C)教科書外の予告しない問題では、bの成績が一番悪い。bは熱心に試験の準備をしてきて、パターン化された問題には答えられるが、それ以外の問題には弱い。aは満遍なく良い成績をとる。

以上の結果から、経験的に感じた傾向を読みとることができる。表4において、座席位置と成績が独立であるという帰無仮説のもとで適合度検定を用いると、 $\chi^2 = 21.6$ であり、P値=0.01になる。したがって、座席位置により成績は影響される。

まとめると、前列の受講生は熱心であり、後列は熱心さが足りない傾向がある。前列のうち、右側aは理解力が良く、左側bは理解力が遅い。

熱心だが理解力の遅い学生が、なぜ前左に坐るのか。次節で左右の位置の意味をみていくと理解できる。すなわち、左手方向に視線が行くときには、その先には非正統的でやすらぎを覚える場所がある。前左bの座席は、教壇からみて、そのような場所である。逆に、学生からみても、教壇は左手方向の非正統的な位置に見える。それにより、教壇までの物理的な距離が前右aの座席と同じであっても、心理的な距離が遠く感じられる。理解

力の遅い学生が坐るのは、そのような理由ではないかと思われる。

(2) いろいろなケースでの左右の意味³⁾

1. カウンセリングにおける左右の意味

カウンセリングのひとつとして、カルフによって始められた箱庭療法がある。そのさい、クライエントが作る箱庭の上下左右の領域に置かれるものの解釈として、グリュンワルトの空間象徴理論が用いられてきた。右が外向性、左が内向性を示し、下が物質、上が精神を現していると意味づけている。研究者は、この見方をした場合に7割くらいは実際に適中していると感じている。

箱庭療法における上下左右と、座席位置の前後左右の意味づけには、類似性がある。左右について言うと、右側は外的世界を示す。座席の場合には、熱心で理解力の良い学生が坐り、クラスの中で理解力という点で正統性をもち表の顔である。それに対し、左側は内的世界を現す。座席の場合には、熱心だが理解力の遅い、クラスで正統性をもたない学生が坐る。

箱庭療法におけるクライエントは、座席の場合には、教壇に立つ教授である。箱庭療法で並べられる部品は、座席の場合には学生である。箱庭療法の場合には、クライエントの意思が箱庭に反映するが、座席の場合には教授の意思が反映するのではなく、部品に相当する学生個々人の意思が反映する。個々の学生が、自分にふさわしい座席位置を選択するのである。その点が、箱庭療法と座席の話の違いである。ただし、位置についての意味づけがクライエントと学生に共通しているので、類似性が出てくるのである。

2. 行動における左右

行動における左右をみよう。「人は左側を歩きたがる」という観察結果がある。東京のある書店の2階から3階にいたる階段を客が上がった後、左右いずれの方向に進路をとるか、2日間にわたり1214名の行動を観察したところ、65.6%の人が左に進路をとった。このデータを2階の階段から踊り場に出るとき階段の中央を通った人だけに限ってみると、左側への選択率はさらに高くなり、87%にも達した。

東京都内の地下道の歩行者を観察したところ、左側通行になりやすいことを見いだしたという観察結果もある。これらの例から、人がとくに意識せず左右の方向を選択し進む場合、左手方向を選びやすいこと、また、不特定多数の人が集まって流れを作る場合、左側通行になりやすいことが言えそうである。

3. 肖像画における左右

肖像画やプロフィール（横顔像）は、描かれる人からみて、右向き左側面の顔をみせることが多い。とくに貴婦人の肖像を描くときには、この傾向が強い。また、ある演出家は「女優を撮るときは、左側面の顔を撮る」とも述べている。レンブラントが描いた335枚の肖像画のプロフィールを分析して、その向きがレンブラントの社会的世界の順に対応して変化していることを述べている研究がある。すなわち、自己、親戚の男性、親戚以外の男性、親戚の女性、親戚以外の女性の順に応じて、プロフィールの向きが、描かれる人からみて、左向き右側面の顔から、右向き左側面の顔へと変化している。自分に社会的距離の近い男性は左向きの顔を、自分から距離が遠い女性ほど右向きの顔を描く傾向がある。このような関係は、レンブラント以外の画家が描いた1776枚の肖像画にも認められるようだ。

右向き左側面の顔を描くことについては、実験によるデータがある。幼稚園児から大学生まで904人に対し、1枚の白紙に利き手で自由に人の横顔を描くように求めた。それ以上の特別な指示はしなかった。その結果、83%の人が左側面のプロフィールを描いた。

4. 演出における左右

肖像画と同様の現象が他の場面でもみられる。同一画面中に複数の人物を描く場合、原則として、画面に向かって右側に身分の高い人物を中央に向けて描くと述べている。描かれる人からみると、右向き左側面の顔を中央に向けている。逆に、身分の低い人物は左側に配される。テレビのインタビューの場合も同様のことが言え、ブラウン管に映るゲストは右側に座り、インタビュアーやアナウンサーは左側に座っているのが通常である。

肖像画・複数の人物の画面・テレビ画面に共通していることは、自分に近い者・身分の低い人物・インタビュアーは左向き右側面の顔をみせ、自分から遠い者・身分の高い人物・ゲストは右向き左側面の顔をみせる、ということである。すなわち、目線が右手方向に行くときは、その先に表向き・正統的な立場の人・敬して遠ざける人がいて、その人もやはり目線を右手方向に向けている。逆に、目線が左手方向に行くときには、その先に内向き・非正統的な立場の人・親近感を覚える人がいる。その人も目線を左手方向に向けている。これは座席の位置についても言えることである。

会議においては、座席が口の字に配置されることが多い。この場合には、議長席からみて右手方向の手前に正統的な立場の人が、左手方向の手前に非正統的な立場の人が座ることになる。正統的な立場の人から議長席をみると、議長席が右手方向にみえるのではなく左手方向にみえる。正統的な立場の人は議長よりも正統的であるとみなせば、納得できる。

5．絵における左右

絵巻物においては、視線は右から左へ進行する。それゆえ、左へ向かうものは「進み」「行く」ものである。この場合、描かれている人物からみると、右向き左側面をみせている。同様のことはマンガにおいても言える。これから事件に向かっていく主人公は全部左に向いている、という。日本のマンガでは右から左に向かって読んでいくので、左を進行方向とし、右を戻る方向として受け取ることが暗黙の約束になっているからであると思われる。しかし、それでは左から右に読んでいく欧米や韓国のマンガが、全部逆向きになっているかという、そうではない。

抽象絵画を始めたカンディンスキーは、左の方は自由・解放、右の方は束縛と述べている。これはキャンパスのどの位置にもものを置くかによって、見え方が異なってくることを示している。キャンパスの下方にもものを置く場合の方が、上方に置く場合よりも安定的にみえる。さらに下方でも右にかたよって置いた場合の方が、左にかたよって置いた場合よりも、より安定的にみえる。アンケートをとると、このように答える人が多い。また、

上方に置く方が開放的にみえるが、その場合、左に置く方が右に置く場合よりも、より開放的にみえる人が多い。

座席の話と対応させると、前右 a が集団において正統的な人の座る位置であるが、キャンパスでは安定的にみえる位置である。また、後左 d が授業から逃避し友達同士でおしゃべりしている人の位置であるが、キャンパスでは開放的な位置にあたる。

6．文化における左右の意味

人の感じる左右の位置の意味は、文化に反映する。ほとんどの文化において、右は左よりもはるかに優位にあると考えられている。とくにヨーロッパ、中東、アフリカ、インド、東南アジアでは、そのように考えられている。右は本質的に聖なる力、あらゆる合法的な善なるものの源泉を象徴している。左は神聖を汚すもの、不潔なもの、あいまいなもの、弱々しいもの、恐ろしい悪いものを象徴している。

中国では「尚左」といい、左を尊ぶ文化がある。中国では南が正面であり、南面すると、太陽の昇る東が左にあたり、太陽の沈む西が右になる。太陽の昇る方向が聖なる空間であり、沈む方向が闇の空間であるので、左が優位ということになる。太陽の昇る方向が聖なる空間であるという考え方は、ヨーロッパや中東等でも同様である。ただし、正面が南ではなく、北であると推測される。そうすると、太陽の昇る方向が右ということになる。

左を尊ぶ・右を尊ぶという「尚左尚右」の思想は、時代によって揺れてきた。その原因のひとつは、自分からみて右・左か、相手からみて右・左かが、時代によって変化してきたからである。日本は中国文化の影響を受けた国であるので、尚左尚右の考え方があった。しかし、現在残っている言葉の意味でいうと、右のつく語の意味は好意的であり、左のつく語の意味はよくないことが多い。推論すれば、多くの人は右が正統的、左が非正統的と感じている。そのことが日本を含め(たぶん中国も含めて)、世界の多くの地域において文化にも反映していると言えるだろう。

7. 左右の意味の違いをもたらすもの

視覚の仕組みは、網膜に受容された光情報が、大脳皮質の視覚領域に伝達され、それが色彩、形、輪郭、位置などに関し多くのモジュールに分解され、それを組み立てることによって知覚されると考えられている。そのさい左方向の視覚情報は右脳に、右方向のは左脳に送られる。それらの情報は脳梁を通じて、ただちに反対側の脳に伝えられる。

右脳と左脳における情報処理には得意分野があり、多くの場合、言語情報は左脳で、図形情報は右脳において、より早く認識される。従って、視覚的に構成する能力は、左脳よりも右脳の方が優れていると言われている。

左方向の視覚は、図形情報の処理に優れた右脳で一瞬早く行われる。右方向の視覚は、言語情報の処理に優れた左脳で一瞬早く行われる。このことが、たぶん、左右の位置の意味の違いをもたらすのだと推測される。ただし、どのようなメカニズムによって、そのような意味の違いが感じられるのかは、今後の脳科学の解明を待たなければならない。

〔 〕 二十世紀の都市計画思想

20世紀の都市計画に大きな影響を及ぼした人物について記述しよう。まず、緑地をベースに都市を造っていくという考え方の流れとして、オルムステッド、ハワード、コルビュジェをとりあげる。つぎに、それに対し都市における安全性の観点から、あえて緑地に否定的なジェイコブスを取りあげる。

(1) オルムステッド

フレデリック・ロー・オルムステッド (Fredrick Law Olmsted : 1822-1903) はニューヨークにあるセントラルパークを造った人として知られている⁴⁾。1858年にパーク建設の統括技師官に任命され、カルバート・ポーの協力のもとに1869年にかけてセントラルパークを制作した。その後、ボストン・パークシステムの設計、ヨセミテ国立公園の設立などを手がけている。

彼の考えは、都市の中に田園の光景を持ち込む

ことによって、都会生活によるストレスが癒されるだろうというものであった。そのさい、ランドスケープの中にある個々の要素を全体的なデザインで統一することによって、落ち着いた感覚をもたらす心理的效果を期待した。したがって、当時は馬車であったが、立体交差による交通システムを取り入れ、車への注意を最小限のものにした。緑の芝生、点在する木立、緩やかでやさしくカーブする道を配置し、都市を支える舞台としての自然らしさに美をみようとした。そこには、効率性、経済性の裏づけもあった。価値の高い公園建設により、周辺地域に良好な市街地の開発を促した。公園隣接地に受益地を設置することや公園債の発行により、公園建設の費用を賄うことができた。

セントラルパークの成功は反響を呼び、ブルックリンやシカゴから公園建設の依頼があった。そのさい、オルムステッドとポーは単に公園だけではなく広幅員の街路 (Parkways and Boulevard) も一体にした都市基盤の整備を提案した。それがパークシステムと呼ばれるものである。このシステムは、またたく間に全米に広がった。オルムステッドが最後に手がけたボストンでは、水系を軸として、立地に応じ都市住民の様々な需要に対応する緑の連鎖をつくりだした。彼は、すべての人が安全に楽しめる「道徳的な場」を作ろうとした。彼の意志は息子 (Fredrick Law Olmsted Jr. : 1870-1957) などによって引き継がれた。人車分離の道路体系については、1928年にクラレンス・スタインとヘンリー・ライトがニュージャージー州ラドバーン・ニュータウンでそれを試みた。

(2) ハワード

エベネザー・ハワード (Ebenezer Howard : 1850 ~ 1928) の思想は「田園都市」として知られている。彼は1898年に「Tomorrow」を出版、1902年に改訂版として「Garden City of Tomorrow」を発行し、田園都市の考えを現した⁵⁾。その実現として、ロンドン郊外にレッチワースを、さらにその後、ウェルウィンの町を造った。

ハワードの問題意識は、19世紀末のイギリスにおける社会状況に基づいている。工業の発展により、人々が都市に流入し続けており、都市は過密になっていた。その一方で、農村は人口流出によ

りさびれていった。都市においては高賃金、雇用機会の多さ、魅力的な生活がみこめるが、高い家賃や物価、過酷な労働や職場までの距離の長さ、汚染された空気などのマイナス面があった。立派な建築物もあれば、貧しいスラムもあるのが都市の特徴となっていた。それに対し農村には、美しい景色や荘厳な公園、スマレの香る森や新鮮な空気、流れる水の音がある。しかし、唯一の産業は農業であり、きちんとした排水などの衛生状態が整っていないために、自然な健全さも多くが失われていた。ほとんど廃村化したところでは、残った少数の人々はしばしば密集して暮らし、まるで都市のスラムと張り合おうとしているかのようにある、と彼は記述している。

都市と農村のプラス面を合わせ持った仕組みを作るにはどうしたらよいか。その答が「田園都市」であった。彼の考えた田園都市は、6000エーカー（24km²）の敷地を想定した。円形だとすると、半径約2.8km。その中心に1000エーカー（4km²）の町を造る。半径約1.1km。町の中心から外周部まで幅員40mの大通りが6本、放射線状にある。町の中には3万人が、外側の農業地には2千人がすむ。町には建物が5500棟ある。町の中心部分には中央公園とその周囲に市役所などの公共施設を配置する。中央公園の周りは幅の広いガラスのアーケードで囲まれていて、雨の日でも心地よく散策することができる。中心部からガラスのアーケードを過ぎ、五番街という円周街路に来るとそれに沿って家が建ち並んでいる。それにそれを過ぎると、幅員140mのグランドアベニューにくる。その街路が田園都市を内と外に二分するところであり、学校や教会などが設置されている。その外側に農地があり、さらに外周リングには、工場や倉庫、乳製品店、市場、石炭置き場、材木置き場などがある。田園都市の最外周には環状鉄道があり、鉄道本線により他の都市と結ばれている。このようにして、人々の生活は田園都市の中で自己完結することが想定されている。

田園都市に人が集まってきて予定の人口を超えてしまう場合にはどうしたらよいであろうか。農業地に人が住みつくようになったら、都市は破壊されてしまう。しかし、外周部の土地は個人の所有ではなく公共のものになっているので、その心

配はない。人口が増えてきた場合には、同じような田園都市を少し離れたところに造ればよい。そのような田園都市がいくつか集まって一つのグループを作る。住人はすべて、ある意味では小さな町に住んでいることにはなるけれど、現実には大規模で実に美しい都市に住んでいて、そのメリットをたっぷり享受していることになる、というのがハワードの構想である。

ハワードの田園都市の考え方は、その後の都市計画に大きな影響を及ぼした。しかし、都市と農村の一体的整備という観点から田園都市が形成されたのは、イギリスの2カ所しかなかった。ドイツ、フランスなどではそれに近い形のものが造られただけにとどまった。それ以外は、都合よく拡大解釈されニュータウンなどに姿を変えた。多くのプランナーは、田園都市の考え方を下敷きにして自らの考えを述べたのである。たとえば、わが国では内務省において彼の著作が研究され、1907年に報告書が作成されている。しかし、田園都市に関するのは初めの部分だけにとどまっている。田園都市の考え方に影響されたものとしては、渋沢栄一が中心となって開発した田園調布があり、郊外型住宅地開発と混同されることも多い。そのさいテクニクとして、レッチワースで用いられたクルドサックやビレッジグリーンという手法が模倣された。すなわち、袋小路の周辺に住居が並び囲い込み型住宅配置や、芝生の公園を核にして住宅が立ち並び配置などである。

ハワードの田園都市の問題点はいろいろ考えられる。ハワードは鉄道を例に挙げながら、田園都市の実現可能性を述べている。鉄道の初期においては公共的な権限がなくても、規模が小さく路線延長も短かったから、少数の地主が同意すれば鉄道敷設ができた。やがて鉄道の優位性が明らかになると、公共の権限によって鉄道敷設が全国的に行われるようになった。だから、田園都市においても同様に初めにいくつか作り、その優位性を明示することによって、公共の権限によって全国的に広げることができるというものだ。しかし、100年経過した今日でもハワードの造った2つの例しかない。明らかに問題点がある。たとえば、農工

一体化し自己完結した小規模な都市そのものが現代の要求には応えられていない。あるいは、小規模な都市の集まりで全国を網羅することは不可能であるとか。この論文では、田園都市の問題点を分析することが焦点ではないので、これ以上は述べない。ただし、緑地をベースにした都市計画という思想は根強く支持されている。とくに近年は環境問題への配慮がそれに加わっている。

(3) ル・コルビュジェ

コルビュジェの考え方は『輝く都市』に現されている。彼は1920年代から30年代にかけて、人口300万人の現代都市はどうあるべきかを考えた。その頃、建築においては鉄筋コンクリートの出現によって、従来の壁で建築物を支えることから、建築物を支える柱と支えられる壁という分離が行われるようになった。それにより高さの制約がなくなり、100mを超える建物が出現した。1931年に完成したエンパイアステートビルは380mにも達している。従来の建物では壁が支えになっていたので、いかに室内に明かりを取り入れるかがポイントだった。近代建築ではこれらの束縛から解放された。

コルビュジェは可能な限り「自然の条件」を復活させるべきだと考えた。すなわち、太陽と広い空間と緑である。そのさい、彼の根底にある考え方は、建築家も都市計画者も創造的活動の面からは同じである、ということであった。「都市計画者は建築によって空間を組織し、いわば大きな容器を建ててその容器の位置と役目を定め、あらゆるものを時間的にも空間的にも連絡網を用いて結びつけるという仕事をする。一方建築家は、例えば一個の住宅を手がけている時でも、あるいはその住宅の中でさらに例えば台所だけを扱っている時でも、同じように容れるところを設けて空間を作り、連絡を確保する。」⁶⁾さらに、「建築や都市計画もこの同じ法則、内から外へと発現し、自分の周囲にあるものを厳しく裁断する法則に従って展開する。・・・自然の中にも人間の中にもあるこの統一、この法則こそが仕事に生命を与えるものなのである。法則が認識され、容認されれば、寄生物や残滓物などは何らの生存権を持たなくなる。」⁷⁾

この考え方から言えることは、ミクロにおいて考えられる合理性をマクロにも適用するということである。一個の住宅をいくら合理的に作っても、住む人にとっては差し支えないであろう。家の中ではプライバシーを保つことができ、やすらぎを得ることができる。しかし、街全体を効率的、合理的に作ったとき、はたしてプライバシーを保ち、やすらぎをうる空間が自ずからできるのであろうか。倫理的には、汚い側面とくに性にまつわる面を排除し、きれいな側面だけで考えたい。それが普通の意味でいう合理性であろう。しかし、それでは人間生活は成り立たない。都市計画においてこの点を強調するのが私の論文の主旨である。また、一個の住宅には広い緑の空間があると癒しになる。その場合、住んでいる人は家族であり、互いに安心できる存在である。しかし、都市において広い緑の空間がとれたとして、はたしてその空間が安全であろうか。それが後述するジェイコブスの主張になる。

コルビュジェは、オルムステッドのパークシステムとハワードの田園都市の考え方をふまえ、近代技術を用いることによって、多くの人口を収容する都市計画を考えた。すなわち、「垂直都市」である。ハワードの田園都市のように、小さな都市を分散するのではなく、公園の中にスカイスクレパーをおくことによって都市人口を納めようとした。そのさい、自動車が必要な位置づけをもつ社会になっていることを念頭においている。すなわち、パークシステムの考え方を取り入れ、歩行者と自動車を分離しようとした。歩行者は歩道ではなく公園の中を歩く。歩道と自動車道路は立体構造にする。

コルビュジェは自動車の位置づけについて、もう一つ考えている。移動の速さについてである。「人間の活動は、何千年もの間、人間や牛、馬の歩度である時速4キロの基調の上に平衡を保っていた。だが今では、この歩調に対し、時速50キロから100キロの滑らかな道路を走る自動車、または船、さらに時速300キロから500キロにもおよぶ飛行機、そしてついには測り知れない速さの電信、電話、ラジオが現れた。」⁸⁾

移動速度には、従来の時速4kmを基調にしたものと、自動車の出現による時速50~100kmを基調

にしたものがある。それによって都市のあり方が変わってくると主張した。人間の仕事に基づき、土地を3つに分類している。すなわち、(1)大地に関する農村、(2)原料の加工変化に関する工業都市、(3)商業の分配交換に関するもの、行政管理に関するもの、思想に関するもの、統治に関するものの都市、である⁹⁾。このとき(2)の工業都市は直線状になること、(3)は同心円の放射状の都会になることを主張している。

コルビュジェは都市の配置について明確に述べているわけではないが、1930年代に提起された中心地理論を念頭においていると考えられる¹⁰⁾。それが同心円の放射線状の都会という表現になっている。4kmの速度のときには原材料の集中、分配が困難で、原材料の移動がほとんど行われなかったため、工業都市は存在しなかった。同心円都市の中で仕事場、小工場があっただけであった。自動車の出現により時速50～100kmの移動が可能になった。通行速度が速ければ速いほど、道は直線になければならない。その道路に沿って原料の加工場所が設置されるのが効率的であると考えた。したがって、工業都市は直線状になる。商品の分配交換は都会で行われる。それは昔からある中心地であり、物が集中し、放射していく場所になる。それによって全地域につながっている。

(4) J. ジェイコブス

ジェイコブスの考え方は1961年に発表した『アメリカ大都市の死と生』に述べられている。彼女は、都市における街路や公園について、どのような状態のものが安全度は高く、どのようなものはそうではないのかという切り口から始めている。彼女のテーマは、実際の生活の中であって、都市というものはいかなる機能をはたすべきか、ということであった。

「大都市とは町をたんに大きくしたものでなければ、ただ郊外地の密度を高くしたものでない。大都市は根本から町や郊外とは違う。その根本的な相違の一つは、都市には互いに顔も知らない人たちが満ちあふれている。」¹¹⁾この点の認識がコルビュジェとは違う。ミクロとマクロでは条件が違うのである。「都市地域がうまくいくための基本的な条件は、一人の人間が自分の知らない人び

との間にいても、必ず自分は安全で心配のない状態にいたいのだと安心していられるようにならなければならない。」そのための町の平和は警察の手によって守られるべきものではない。「公衆の平和は、元来人びとが自分たちの間で自発的にコントロールし、標準化した、複雑でほとんど意識されない細かい仕組みによって維持されるべきである」¹²⁾と述べている。

具体的にジェイコブスは、街路の安全性について、「いつも頻繁に使われている街路は安全な路となる傾向にある。往来の少ない街路は危険な路になりやすい」という。知らないよそ者がいても街路が安全であるためには3つの主要な条件が必要である。(1)パブリック・スペースとプライベート・スペースをはっきり区別すること。(2)街路に常に「多数の目」をおくこと。そのために建物が路面に背を向けるのではなく、通りに面して建てられるべきこと。(3)歩道は常に誰かが使っていなければならないこと¹³⁾。すなわち、都市の歩道や街路そのものに意義があるのではなく、その周囲との関係から生じてくる機能に意味がある。都市を構成している要素が、互いに非常に違ったものでありながら、互いに確実に具体的な方法で補いあっているという多様性が重要なのである¹⁴⁾。

ジェイコブスは街路、公園、地区の安全性をテーマに論を進めてきて、相互に補いあう多様性を強調した。それを生じさせるための条件を4つ列挙している¹⁵⁾。第1に、地区は一つの基本的機能だけでなく、二つ以上の機能をはたすことが望ましい。第2に、たいていのブロックは短くなければならない。街角を曲がる機会が頻繁でなければならない。第3に、地区には建てられた年代と状態の違った建物がいろいろと混じり合っていなければならない。第4に、人びとが十分に密集していなければならない。

このような考え方から、ジェイコブスはハワード、コルビュジェと続く都市計画思想に反発し、厳しく批判している。ハワードの田園都市については、「人びとを救うための彼のやり方は、都市を破壊することであった」と述べている¹⁶⁾。コルビュジェについては、「彼の概念には、驚くばかりの明快さ、簡潔さ、調和があり、非常に明白で理解しやすいものであった。すなわち、うまい広告みた

いにひと目ですべてがわかるといったものであった。「しかしながら、都市はいかなる機能をはたすかという段になると、田園都市の場合と同様、ごまかしてしまうより他に手がないのである」と書いている¹⁷⁾。

ハワードやコルビュジェの思想を受けついで都市計画家がほとんどであるが、「彼らは都市計画というと、市民は人口のまばらなきれいに整理された秩序づけられた静かな場所を求めている、ということを前提に設計をはじめ。」¹⁸⁾ また、「ユートピア的考え方を優先させ、レジャーを強制的に制限してしまうやり方は、都市にとっては、見当違いというよりももっと悪いやり方である。」¹⁹⁾ と断罪している。

〔 〕わが国における都市計画の実施例

代表的な例として、多摩ニュータウンと筑波研究学園都市が挙げられよう。それを概観し、地方都市の例として郡山市をみよう。

(1) 多摩ニュータウン

多摩ニュータウンは1960年代から開発が進められたが、当初は大規模な宅地開発にふさわしい法律がなかった。1963年に新住宅市街地開発法を成立させ、1965年に多摩ニュータウン（約3000ha）を含む南多摩新都心（約7500ha）について開発計画が策定された。その後も、1977年に多摩ニュータウン西部地区大綱が決定され住宅が供給された。

都市計画思想との関連で記述しよう²⁰⁾。問題になったものとして、寺社のような宗教施設、飲み屋街のような商業・風俗施設など、都市計画に含まれない土地利用が挙げられる。このような計画に含まれない土地が計画区域内に点在することによって、開発理念からは望ましくないが、結果として赤ちょうちん街ができた。もしすべての土地が開発理念に従ってできていたら、表の側面しかもたない広大な住宅街ができあがっていたことであろう。

多摩ニュータウン建設では、昭和58年度「緑の都市賞建設大臣賞」を受賞している。その理由として「緑とオープンスペースで住区面積の30%以上を確保した。自然のふれあい、豊かな緑の保全

と再生といった、オープンスペースの充実に関する計画理念を前面に位置づけ、みどりの創造と街づくりを一体化させた総合的な計画、実践が評価され、緑の都市賞を受賞した」とある。これに続いて、鶴牧・落合地区、ベルコリーヌ南大沢の開発等で受賞している。そのさい、基本コンセプトは「自然と都市との調和」である。

(2) 筑波研究学園都市

研究学園都市を筑波に建設することが閣議決定されたのは1963年である。東京の過密解消、科学技術振興・高等教育の充実を目的に約28400haの都市建設が開始された。1966年から用地買収を開始、1970年には「筑波研究学園都市建設法」が制定され都市建設の法的枠組が作られた。1980年から研究教育機関が移転・新設され始めた。現在では、国・民間合わせ約300におよぶ研究機関・企業があり、人口約18万人、研究者約1万3千人がいる²¹⁾。

居住環境のコンセプトはつぎのようである。(1) 自然環境および地形を生かすことにつとめる。(2) 施設は集約的に配置し、なるべく高層化する。(3) オープンスペースを確保する。(4) 団地は必要最小限にとどめ、各団地ともに統一的なデザインとする。(5) 敷地周辺には緑地帯を設ける。(6) 道路は都市全体の交通システムに適合した計画を行い、歩車分離を原則とする。なお、緑道、自転車道の設置を図る。(7) 団地内施設へのアプローチは、原則として主幹線道路から直接侵入することを避ける。(8) 団地の諸標識は、それぞれ統一的なデザインとする。

その結果、「本都市では、自然・田園的環境に囲まれた、ゆとりある研究環境、居住環境が実現された。また現在では、研究教育機関等に残る既存樹林に加え、施設内緑化や街路樹等計画的な植栽帯も順調に成長し、緑豊かな都市として、風格を備えつつある。また、土地区画整理事業等の計画的な実施により、開発段階のスプロールの発生を抑制し、特に、周辺開発地区では、平地林等の自然環境や、田園的環境が保全されてきた。」²²⁾

多摩ニュータウン 筑波研究学園都市の例とも、都市計画の思想はオルムステッド、ハワード、コルビュジェの考え方を下敷きにしていて、ジェイ

コブスの批判は考慮されていない。

(3) 郡山市²³⁾

郡山は宿場町であり、明治初年の人口は5千人未満であった。郡山の発展は安積平野の開拓にあった。その端緒は大槻原の開墾である。郡山市街から西に2.5km離れたところに拠点をおき、開成社が中心となって明治6年(1873年)から数年かけて開拓を行った。もうひとつは安積疎水である。猪苗代湖から水を引くことによって安積平野を潤すことであった。明治12年に着工し、明治15年に第一次の完成をみた。

郡山に鉄道駅ができたのは明治20年である。駅は郡山市街地の東端に設置された。やがて南北を結ぶ東北線と、東西を結ぶ磐越線とが完成し、郡山はその結節点として重要な位置を占めることになった。そのさい、郡山の発展の受け皿として、駅周辺の市街地と開発拠点である開成山の二極が中心となった。

都市計画としては、大正6年(1917年)から13年にかけて実施された西部高台地の市街地造成が最初である。これは郡山市街地と開成山とに挟まれた地域であり、そこを住宅街とするため、区画整理し道路・橋梁が設けられた。ただし、都市計画のための法整備はできていなかったため、明治32年に農地利用増進のため公布された耕地整理法に基づき、明治42年に改正された法律を適用している。この事業は民間主導で受益者負担として行われ、該当する土地所有者から土地一割を供出させている。その裏づけは耕地整理後の地価高騰である。見込みは的中し地価は上昇した。郡山中心街と比較して地価が安かったため、大正後期から昭和前期にかけて住宅街として発展することになった。計画思想からみると、オルムステッドに一脈通じるものがある。価値の高い公園建設により、周辺地域に良好な市街地を開発し、地価高騰により公園建設の費用を賄うという発想である。郡山の場合には緑地に囲まれており公園建設という必要はなかったため、その部分の発想はなかったが、経済的な裏づけという点では同じ考えである。

都市計画法の適用という点では、昭和初期の計画が挙げられる。国は、大正8年に宅地の利用増進のため都市計画法を制定した。これは耕地整理

法の手続きを準用し、土地区画整理事業の施行を規定したものであった。郡山市では、昭和2年4月に都市計画法の適用を受け、本格的な計画立案に着手した。昭和3年には、乱立する建築物の秩序ある建築を目的として市街地建築法の適用を受けた。さらに昭和4年には、周辺の大槻、富久山、永盛地区を含めた第一次都市計画区域を決定し、将来収容人口を21万3千人と見積もっている。昭和8年には、道路網を整備するため都市計画街路37本を決定した。昭和10年には、商業・工業・住居地域など用途別に地区分けして指定を受けている。昭和12年には風致地区の指定を受けた。昭和13年から15年にわたって下水道計画の調査を行った。この当時、郡山市は急速に都市化していた。計画によると、3年後の昭和18年には人口15万7千人を予想していた。ちなみに国勢調査による人口は、大正14年(1925年)に4万3千人、昭和10年(1935年)に5万4千人である。このように人口急増による都市化に対応するため、都市整備を痛感し計画を立案していた。しかし、これらの計画は戦時体制の強化とともに本格的には着手されなかった。

敗戦後、昭和21年に制定された特別都市計画法の制定を受け、当年8月から戦災復興事業が10年以上にわたって行われた。その内容は、道路拡張のための主要幹線道路事業や、生産都市再建整備事業、土地区画整理事業などである。戦後復興は急場の対応に追われる事業が多いが、郡山市の場合には次のような青写真を描いている。「団体広場・ハイヤー駐車場・バス着発場などを擁し、アカシアの繁る約4千坪の駅前広場、またここから県社(安積国造神社)までの中央に緑樹帯をもった幅40mのメインストリート、市を南北に縦断する幅40mの国道、さらに、これらに連なる幅24mから18mの産業地帯、倉庫用地用3本の大道路、そして、五十鈴湖・荒池・貯水池を中心とする3つの緑地帯と麓山グラウンド - - -これが新装なる東北の関門=工都郡山の姿である」戦前において都市計画を積み重ねてきた成果がこの構想に生かされているものと思われる。計画思想として明確に意識したかどうかは判然としないが、世界の潮流である緑地をベースに都市空間を配置するという発想もみえる。

国においては、昭和24年に耕地整理法が廃止さ

れ、昭和29年に土地区画整理法が制定された。これは宅地の利用増進に加え、公共施設の整備改善を追加したものである。昭和43年には新都市計画法の制定、昭和50年には特定土地区画整理事業が創設され、大都市地域における住宅地等の供給促進に関する特別措置法が制定された。これらの法整備とともに、国土政策として10年先の経済社会の望ましい姿と、そこに到達するための方策を描いたものとして全国総合開発計画が策定された。この計画は昭和37年（1962年）、昭和44年（1969年）、昭和52年（1977年）、昭和62年（1987年）、平成10年（1998年）と5回にわたって作られた。

郡山市では人口拡大による工業都市建設の意欲が強く、昭和28年に郡山工業都市計画書を作成している。昭和35年8月に自治省が百万都市建設構想をもとに地方開発基幹都市構想を発表すると、昭和36年6月に、郡山市は独自に須賀川市・本宮町・三春町を含んだ郡山地区基幹都市計画書を作成し、人口50万人の工業都市をめざした。昭和38年の新産業都市建設計画に基づき、昭和39年3月には新産業都市としての指定を受けて、工業化を進めようとした。昭和40年代になると、工業発展は予想以上に進み、大幅な計画見直しに直面した。

昭和44年5月の新全国総合開発計画（第2次全国総合開発計画）が閣議決定されると、昭和45年3月に郡山市総合基本計画を作成した。昭和46年度を初年度、昭和60年度を最終年度とし、都市基盤の整備、市民生活の向上、教育文化の振興、産業の振興、市財政という5つの柱が掲げられた。しかし、昭和46年（1971年）の狂乱インフレ、昭和49年（1974年）の不況により、この計画は現実から遊離してしまった。この計画で評価できるのは次の点である。(1)経済開発を中心に据えたが、社会福祉なども含め総合的にした点で、本格的都市計画であった。(2)住宅地・商業地・工業地の配置がある程度成功した。(3)急激な自動車社会に対応した道路網の整備ができた。評価できない点は、(1)工業の発展を過大見積もりした。その結果、人口増加を多く見積もりすぎた。(2)商業発展を過小評価し、とくに小売業の発展を小さくみた。(3)郡山市の意欲はともかく、国や県の行政権の範囲内でしか行動できなかった。

国の第3次全国総合開発計画および福島県の長

期総合計画を考慮し、昭和53年12月に郡山市新総合計画が作成された。昭和54年度から昭和68年度までの計画で、策定にさいし市民5千人を抽出し意識調査をした。人口見通しは昭和68年（1993年）で40万4千人であり、就業人口は19万3千人を予定した。ただし現実には、国勢調査の数字で1995年が32万7千人、2000年が33万5千人である。昭和58年（1983年）にこの計画は全面的に見直された。

その後、平成7年（1995年）に郡山市第四次総合計画が策定され、21世紀の街づくりが示された。そこでは、「土地利用の効率化、用途の再編を進めるとともに、優良農地および自然環境のすぐれた樹林地等の保全に努め、開発と保全のバランスに配慮した適切な土地利用の誘導をはかります」とある。

郡山市の都市計画を概観してきたが、明治から大正にかけては地元のアイデアで開拓および住宅地の整備が行われてきた。昭和になり、人口が急増し都市化が始まるとその対策に追われ、国の提出したアイデアにすぐに反応しつつ計画立案をくりかえした。しかし、戦時体制への移行により計画は実現できなかった。戦後も国の提出したアイデアに準拠して計画を立案してきた。そのさい前提となった考え方は成長指向である。たえず多めの人口予測をし、自動車社会の到来を予想して道路整備を充実させてきた。計画思想との関連でいうと、緑地とのバランスで都市空間を配置するという考えが下敷きにあった。しかし、日本の地方都市では緑地に囲まれているのが通常である。中心市街地に関して言えば、緑地をベースにした都市空間という発想だけからは、本当に活力のある街が実現するのか、大いに疑問のあるところだろう。近年多くの地方都市でみられる中心市街地の空洞化現象がそのことを端的に示している。

〔 〕人の感性を反映した都市計画を

街における建物配置には、人間の脳という「自然な生理」を反映した側面がある。現在のところ、これを直接的に証明するまでには至っていない。しかし、傍証的な現象を積み上げていくと、そのように推測してもよいのではないと思われる。

人間の脳における右脳と左脳の違いについては

かなり研究がされてきている。多くの場合、言語情報を扱うのは左脳が優れており、図形情報は右脳が優れている。眼の仕組みから、最初は左方向の視覚情報は右脳に、右方向のは左脳に送られ、脳梁を通じてただちに反対側の脳に伝えられる。このことが、たぶん、左右の位置の意味の違いをもたらすのだと推測される。その現れ方は、人から見て右手方向にあるものは正統的で、立派、表の側面、建前、気張ったものであり、左手方向のものは非正統的で、劣った、裏の側面、本音、癒し的なものと感じられる。

もちろん、このような感覚には個人差がある。右脳左脳の機能が逆になる人もいる。箱庭療法における論文や、キャンパスのどの位置に描くのが安定的か開放的かというアンケートを参考にすると、7割くらいの人が記述したように感じるのではないと思われる。個々人からみた左右の意味づけとして、箱庭療法における解釈、階段や地下道での通行位置、肖像画の向き、演出における人物の位置、絵画の構図を例として挙げた。また、集団の中における個々人の相対的な位置として、座席の例を挙げた。都市における歓楽街の位置も後者の例になるであろう。いずれの場合にも、その当事者からみて右手方向が正統的、左手方向が非正統的と解釈すると整合性がある。そのさい、これらの現象をもたらす要因が脳の機能にあると考えるのが無理のない推測であろう。

都市計画思想を概観したが、オルムステッド、ハワード、コルビュジェと続く考え方には、ユートピアとしての都市が描かれている。広い緑の空間のなかに、秩序立てられた建物が点在し、汚い側面の存在を許容していない。ごちゃごちゃした街の空間とか、スラム街、あるいは性を商売にした店舗のある歓楽街を認めていない。

ジェイコブスは生活者の立場から彼らの考え方に反発した。彼女は安全性という切り口から、大都会と町とは本質的に異なると主張した。小さな町では道を歩いている人は顔見知りが多いが、大都会では見知らぬもの同士が歩いている。都市における街路、公園、あるいは地区というのは、それ自身単独で安全であったり危険であったりするわけではない。周囲との関係において安全であっ

たり危険であったりする。生活者の立場から、街路、公園、地区が心地よいものであるためには多様性が必要であるというのがジェイコブスの結論である。ところが、ユートピアとしての都市思想には、多様性というごちゃごちゃした無秩序に見える空間は許容しがたい。アメリカにおける多くの都市計画がユートピア思想を背景に進められてきた。ジェイコブスには、生活者の立場を破壊する都市計画に映ったので、猛烈に反対をした。

本論文で主張する考え方は「人の感性を反映した都市計画」である。切り口は「右と左の位置の意味」である。ここでは、都市のうちとくに中心市街地を対象にしている。人口が多くなるにつれて、中心市街地に立地する施設や店舗は多様化してくる。立派なデパート、銀行、ホテルといった建物や、一流企業が入居するビルが建ち並ぶ。地方に行くと、市役所や県庁が一番立派な建物であり産業であったりする。あるいは、しゃれたブティックやベーカリー、明るいファミリーレストランなどがある。買い物街はアーケードになっていたりして、各種の店舗が並んでいる。その周辺に飲食街がある。レストラン、食堂があり、居酒屋、スナック、バーがある。さらに周辺には、呼び込みの男性や立ちんぼの女性がいるうさんくさい店舗や、ヘルス、ソーブランドといった店舗がある。もっと人口の多い都市になると、街中にラブホテルが出現してくる。これら多種多様な施設や店舗はでたらめに混在しているわけではない。「人の主たる流れ」を基準として、あるべきところに存在している。

〔 〕で記述したように、多くの都市では、その街における人の主たる流れがある。その流れに沿って、あるいは、その右方向に正統だとみなされる施設や店舗が配置される。また、左方向に非正統的な店舗が張りつく。このような傾向が多くの都市で見られる。個々人については、右方向が正統的で左方向が非正統的であるという感じ方が7割程度しかみられないとしても、多くの人の感じ方を総合して一つ街を形づくるとき、7割以上の可能性でこのような現象がみられるであろう。北海道の都市では9割であった。

もちろん例外はあるし、解釈に苦しむ例もある。

とくに、人の主たる流れが変化してしまう場合には、店舗配置も変わることになる。鉄道駅の設置による影響はことさら大きい。たとえば城下町の場合、街道筋にある町人町に沿って繁華街が形成されてきた。ところが鉄道駅を人の住んでいない街はずれに造ってしまった例が多い。時間の経過とともに、鉄道駅を起点として人の主たる流れが形成されてくる。店舗もそれに応じて配置されてくる。当然、繁華街の位置も変化する。しかし、この変化にはかなり長い時間を要する。たとえば、50年とか100年とかの時間である。それゆえ、昔からの繁華街と新たな繁華街が混じり合い、位置の意味を解釈するには複雑な様相を呈する。逆に言えば、一見ここで主張するような現象がみえないとしても、歴史的に街を解釈していくと、成り立つことも多い。都市計画は長い時間にわたって影響を及ぼす。それも考慮し、人の感性にあった計画を立てなければならない。

本論文では日本の都市しか調査していない。日本の都市では、起点から流れていく方向にだけ街が発展し、反対方向は裏地域として取り残されることが多い。ヨーロッパの都市のように、昔は城壁で囲まれていて、その中心に教会や広場があり、そこを中心に街が構成されている場合がある。そのときには360度が対象であり、表や裏という区別も、右や左という区別も必要ないかもしれない。しかし、もし街における施設や店舗の配置が人間の脳の機能を反映しているとするならば、日本だけに当てはまる現象ではないであろう。起点と人の主たる流れが明確ならば、左右の位置の意味づけには普遍性があるのではないかと推測される。

「人の感性を反映した都市計画」というとき、具体的にどのような基準で計画を立てたらよいであろうか。オルムステッド、ハワード、コルビュジェに至る考え方では、具体的な基準を述べることは容易であった。もちろん、彼らの思想に沿って、そのままの形で実現された例は少ない。パークシステムではラドバーン、田園都市ではレッチワースと少数例しかない。コルビュジェの場合には、彼のユートピアをそのまま実現した都市があるとは聞いていない。しかし、彼らの影響のもとに作られる都市計画は、緑のオープンスペースを

基盤においてビルを点在させること、ならびに、自動車交通と歩道を効率的に配置することが基準になっていると思われる。すなわち、各施設の機能を単純明快にし、効率的に配置することが考え方の基礎にある。

ジェイコブスの考え方では、具体的な基準はどうなるであろうか。彼女の著作を日本語訳した黒川紀章は「訳者あとがき」で、そこが問題であると指摘している²⁴⁾。ジェイコブスが主張していることは、街には多様性が必要であるということだ。住居地域、商業地域といった用途の多様性ばかりでなく、新しい建築と古い建築の混在する多様性、小規模なものと同規模なものというスケールの多様性などである。それによって、そこに生活する人びとの年齢や職業、あるいは、ライフスタイルといったものが多種多様に混在することになる。それが安全で心地よい空間を作り出す。この多様性を成立させる要因として、街区ブロックが小規模であることと、人口が高密度に集中していることの2つを挙げている。この点が従来の都市計画理論の基礎にある機能の単純化とは異なっている。しかし、それを構造づける建築的な手法がいかなるものになるのか、そこが問題であると黒川紀章は述べている。

本論文では「人の感性を反映した都市計画」を主張するが、実際にはどのようにしたらよいであろうか。ジェイコブスと同様、多様性が必要である。機能の単純化によって街を構成するのであれば、資金と条件がそろえば、比較的短期間のうちに実現化可能であろう。たとえば、着工して完成まで5年とか10年とかの期間で実現できるであろう。しかし、多様性をもたらすためには、かなりの時間経過が必要だ。多様性は、ハコモノを造ったからすぐに得られるものではない。熟成期間が必要なのだ。この点が、計画を難しくする。長い熟成期間のあいだには、当初の意図とは違った空間に変質してしまうことがありうる。そこまで含めて考慮する都市計画は、とても困難な仕事であろう。

多摩ニュータウンの例を記述したが、都市計画の土地利用には含まれない商業・風俗施設が区域内に点在し、結果として赤ちょうちん街を形成し、人間的な潤いをもたらすことになっているという

見解もある。筑波研究学園都市の場合には、計画区域内はユートピア的に建設されているようだが、人間的な潤いをもたらす機能は周辺の土浦とか求められることになった。筑波大学の建物配置にも、ユートピア思想のなれの果てをみてとれる。「広場は建築家・都市計画家の憧れである。第1図（広場の写真：鈴木による注記）を見れば誰もが、建築家・都市計画家の都市城壁に囲まれた広場（アゴラ）の夢（ギリシャ都市の幻影）をモルモット大学で実現させたと理解するであろう。この何の役にも立たない大きな広場は、日射しの強い夏、梅雨・秋雨の頃、からっ風の冬、つまり1年のほとんどの期間楽しく歩けるような所ではない」²⁵⁾

これからの都市計画には、人間的な潤いも考慮することが必要であろう。そのためには、機能を単純化し効率的に配置するという観点からだけではなく、多様性を熟成していくという観点からも取り組まなければならない。人間的な感性の側面および歴史的な視点からも街の形成を研究し、具体的な計画手法に取り入れていくことが求められるであろう。

[注]

- 1) この後に続く「 」の部分は参考文献(3)からの引用。それぞれ70, 70, 131, 131ページに記載されている。
- 2) この節の内容は、参考文献(1)の〔 〕8を要約したものである。
- 3) この節の内容は、参考文献(1)の〔 〕を要約したものである。
- 4) この節の内容は、参考文献(4)およびホームページからの情報を参照した。
- 5) この節の内容は、参考文献(5)およびホームページからの情報を参照した。
- 6) 参考文献(6)の20ページ
- 7) 参考文献(6)の66ページ
- 8) 参考文献(6)の37～38ページ
- 9) 参考文献(6)の168ページ
- 10) 中心地理論については、参考文献(2)を参照。
- 11) 参考文献(7)の39～40ページ
- 12) 参考文献(7)の40～41ページ
- 13) 参考文献(7)の45ページ
- 14) 参考文献(7)の23ページ
- 15) 参考文献(7)の172～174ページ
- 16) 参考文献(7)の26ページ
- 17) 参考文献(7)の33ページ
- 18) 参考文献(7)の48ページ
- 19) 参考文献(7)の52ページ
- 20) 参考文献(8)の16ページ
- 21) 参考文献(9)のホームページ
- 22) 参考文献(9)のホームページ
- 23) 参考文献(10), (11), (12)を参照
- 24) 参考文献(7)の267～268ページ
- 25) 参考文献(3) 132～133頁

参考文献)

- (1) 鈴木武『街と都市の空間配置: 左右の位置の意味』法政大学経営志林第36巻第3号, 1999年10月, 11～32頁。
- (2) 鈴木武『都市人口と順位との関係』法政大学経営志林第34巻第4号, 1998年1月, 105～118頁。
- (3) 小谷清『社会科学の方法: 都市』筑波大学「経済学論集」第57号, 2007年3月, 51～137頁。
- (4) 石川幹子『オルムステッドとパークシステム』『都市計画』1997年, Vol.45, No.6, 6～11頁。
- (5) エベネザー・ハワード『明日の田園都市』,(翻訳) 山形浩生, ホームページ <http://www.genpaku.org/gardencity/gardencityj.html> に掲載。
- (6) ル・コルビュジェ『輝く都市』(坂倉準三訳, 1968年, 鹿島研究所出版会)。この本は1947年に『都市計画の考え方』というタイトルで、『輝く都市』の要約決定版として出版されたものの日本訳である。
- (7) J. ジェイコブス『アメリカ大都市の死と生』黒川紀章訳, 鹿島出版会, SD選書118, 1977年発行。
- (8) 倉沢進『社会学から見た都市の陰と都市計画』『都市計画』1997年, Vol.46, No.2, 13～16頁。
- (9) ホームページ『これからの筑波研究学園都市』, <http://www.info-tsukuba.org/what/after/chp1.html>
- (10) 郡山市編纂『郡山市史』近代上(1969年), 近代下(1971年), 現代(1973年)。
- (11) 郡山市編纂『郡山市史』続編1(1984年), 続編2(1994年)。
- (12) 郡山市編纂『郡山市 都市計画マスタープラン2000』, 2000年。